台湾銀行一行のみの借り入れが頼りである。が、直吉は頑迷に会社の近代化を拒んだ。収支の決算が明らかでない鈴木への課税は、三井よりも過重であった。

大正八年、よねは栄町の旧宅から須磨区東須磨の邸宅に移った。大鈴木商店の象徴としてのよねが住むにふさわしい一万二千坪の御殿である。

財政界の大物たちは、神戸を通る際、御殿を表敬訪問した。後藤新平もしばしば訪れたという。饗応を受けた高官たちを、岩次郎を従えたよねは、玄関まで見送るが、車までは送らなかった、といわれている。

御殿に住むようになっても、よねの生活は変らず、つつましく、魚などめったに食べず、相変らずチリメンジャコに大根おろしが食膳にのせられた。到来物のカステラや羊かんは、大切に倉にしまいこまれ、正月、店員が家族連れで集まる祝宴で、放出され、羊かんはぜんざいに化けて子供たちが食べ、カステラや干菓子は、福引きの景品となったが

「カステラは、カビが生えてましてな。わたしら、ようそのカビのカステラ頂いて、食べて、ハラこわしたこともあります」

義一氏はそれすらもなつかしそうに話す。

古布を大量に買いこんで、ヒマさえあれば雑布づくりをした。出来上った雑布は、会社で使うものと、社員に贈るものとで、いくらでも需要はあった。千代子氏も亀甲や、いろんな幾何学模様に刺された雑布を持っている。

雑布作りは、海岸通の会社へ出社し、社長室へ入ったあとも、ときとして続けられた。

須磨御殿で、男衆と一しょに作った花や野菜は、黒い大型の乗用車で会社へ運び、社員に持って帰らせた。よねの丹精した高菜や春菊は、アクが少なく素直に育ち、やわらかくおいしいと評判であった。

社長室のよねには、むろん会社の企画のすべては知らされる。最後の決定の印を押すのもよねであったが、それは企画されたものに「諾」を与え、認めるだけでよかった。責任だけは自分がとる、という姿勢は最後までつらぬかれ、商戦争に邁進する男たちに、後顧の憂いをなからしめた。それは、よね個人に対するマスコミの誹謗、雑言の類にも一切無言で通す、という態度にもあきらかであったろう。

二代目岩次郎は、知る人すべてが言うように、犀利（頭の働きが鋭い）で裁量もある人物であった。娘の千代子氏自身も、大して勉強した覚えもないうちに自然にエラリークイーンを原書で読むようになった、という才知に恵まれているが、千代子氏の父としての岩次郎評にも頷けるものがあった。

「祖母は、大して頭のええ人とは思いませんでしたけど、父は大へん頭のええ人でした。あれほど目から鼻に抜けるというか、何というか、それでいて包容力があって、人をそらすことがなかった。父ほど頭のいい人は、その後あまり知りません。遊んだのはいけなかったけど」

千代子氏は俊才の高畑誠一と結婚し、ロンドンで数年暮らし、周辺に大を成した人物を多くみているはずである。その千代子氏の言葉には説得力があった。

岩次郎は、母よねの姿勢をよく理解し、会社の経営に口を出すことはなかった。ただ名のみの代表として、社員のボーナスの値上げ案が出たりした場合、真っ先に賛成するのが岩次郎であった。彼はありあまる能力を、遊蕩・趣味に転じ、多額の私財を浪費、足らぬ分は会社の会計に来て無心をした。

よねは、馬・狩猟・釣り・女・食道楽と、岩次郎がする浪費を苦にし、よく冨士松や直吉に相談したが、

「大将がなんぼ費うても、鈴木は大丈夫でっさかい、お家さん心配はいりまへん」

二人の返事は決まっていた。

昭和五十九年十月十五日、柳田義一氏の案内で六甲篠原北町の祥竜寺を訪れた。よねの胸像を見にいったのである。よねの像は、昭和十二年十二月十五日、鈴木家に関わる人たち五百名から、先代岩次郎像とともに贈られたものである。その折の心境をよねは歌に託している。

先人とおのれとの胸像の成るを
よろこびて
おおけなや　おのがふたりの
かおかたち　されともうれし

千代にのこらん

晩年のよねが最も熱を入れたのが短歌であった。西宮戎神社の吉井宮司が師であり、月のうち二度土曜日に、自家用車で出かけた。

千代子氏は

「晩年塩屋へ移ってから、遊びにゆくと、よろこんでくれました。ほかの孫は、祖母はこわいもん、として近よらなかったんですが、私には、作った短歌を、これどないや、と見せたりしてました」

よねの短歌は、あまりうまいものではなかった、と千代子氏は指摘する。

「歌を見たら、なんやしら、古い歌のあっちからとったり、こっちからよせたりしたようなもんが多かって、こんなんあかんわーと言いましたら、そうか、と言うてましたけど」

義一氏も、よねの短歌について、直吉が一度だけ

「お家さんの歌は、あかん。もっともっと勉強せな」

と言っていたのを聞いている。

直吉は「白鼠」と号して、俳句を残している。

背水の陣屋を囲む桜かな

は、大正十二年（一九二三）独裁者として君臨してきた直吉が、財政の逼迫に直面して詠み、

落人（おちうど）の身をせばめ行（ゆく）時雨哉

は、永年の東京での宿舎であったステーションホテル二十号を引きあげる感懐だった。

直吉夫人とくは、句作では先輩であり、直吉に手ほどきしたのではないか、といわれている。

祥竜寺とよねの関係は、昭和二年の寺再建に、よねが先々代の愚渓老師から請われ、基金を寄付した後のことである。愚渓老師が平野五宮町の祥福寺老師を勤めていた折、よねが訪れ、老師に帰依した縁がもとになった。

菅応蜂現住職は、

「わたしは直接よね女史は知らないのですが、よね女史が作った雑布は持っていましたね、硯敷にしていました」

墓地の一遇に、ニメートル近い台座にのせられ、よねの胸像はあった。下から仰ぎ見る角度でしか見えぬしつらえであった。

曲折を経て、鈴木王国は昭和二年瓦壊した。鈴木は倒産したのである。

「要するに鈴木王国の最大禍根は、没落した一群の戦争成り金と同様に、急激に手を広げすぎて、人も組織もその大発展にマッチし得なかったのである。」

（『海鳴りやまず』第三部）

直吉自身の見解は、鈴木倒産の第一原因は「統制力の喪失」、第二は「深刻な不景気と資金の固定化」である。

が、実は鈴木商店再建案はひそかに資金パイプの台湾銀行から示されていた。条件のひとつに金子直吉の退陣があった。それをのめば鈴木は救われるという瀬戸際にきても、よねと岩次郎は「金子直吉は鈴木の功労者である。切ることはできぬ」として、直吉と鈴木の運命をともにする決断をした。終始私心なく主家のためにのみ働いた直吉に報いるため、よねと岩次郎は、王国の終えんをもいとわなかったのである。あとにもさきにも例をみぬ幕切れであった。

すべてが終ってのち、よねが洩らしたひと言は、

「かねてからわかってはいたけど、エレベーターみたいで、降りてしまうまでは気持わるいものやなあ」

であった。

よねは、須磨御殿をただちに引き払い、岩次郎の妻兎三（トミ）の親のために建てられた塩屋の邸に移る。

塩屋での十年余は、短歌づくり、魚釣り、草花づくり、碁並べ、鼓など数多い趣味と、神仏参りを熱心にした。多くの日本人同様、よねは神・仏に手をあわせ、己の今日を感謝するのである。また、この国に生まれたことの感謝は、皇居の庭園清掃奉仕団に加わることで表現した。

相変らず粗食であり、身じまいは、隙なくきっちりとした。外出のときはいつも金の水筒を女中に持たせた。訪問先の人物に失礼にならぬよう、事前に持参の湯ざましで口をすすぐのだ。

千代子氏は肉親としての目でもって、よねを平凡な女、と言う。が、ことにのぞんで、動じぬものは、気骨のある大物といわれるのである。

死もまた、大物といわれるのにふさわしく、昭和十三年五月六日「きょうはちょっとしんどいな」と早目に床に就き、再び起きなかった。狭心症と診断された。八十七歳の生涯を通じ、便秘症というほかは、大正年間にコレラに感染したきり、病気らしい病気はしたことがなかった。

直吉は一夜のうちに、長文の弔辞を認め、よねの霊前に捧げた。男も瞠若（どうじゃく）するよねの偉業をたたえた。

——刀自は居常甚だ閑雅謹直にして温容自ら任じ喜ぶことあるも怒ることなく自誡することあるも人を責めず而うして部下の愛育に努めたるも——

と、婦徳の大であったことをたたえ、事業の回復ができなかったことを嘆き詫びてもいる。よねは、事業には直接何ら関わらなかったが、働きよい環境は作った。店員たちの妻の教育もした。妻たちに無用の競争は厳に禁じ、新年の祝賀や、園遊会などに、妻たちが着用するのは、よねが与えた同じ紋入りの着物であった。鉄色がかったねずみ色の着物のみの姿は、鈴木商店婦人部の制服でもあった。

鈴木関係者で、辰巳会という親睦会が作られていることは先に書いた。昭和五十九年現在会員二百六十三名、七十六歳から九十八歳まで、高齢者ばかりであるのは当然だが、年に何回か催される会合には、物故会員の妻女が現われる。

「ほんとに、働きよい職場だった、と主人が死ぬまで言うてましたんで、どんな人たちがどんな話をするんだろうか、と話を聞きにきます」

鈴木商店が幻のように消え去って、六十年にも達しようという現在での、これは実話である。

〈参考文献〉

・『海鳴りやまず』第一・二・三部　神戸新聞社編　神戸新聞出版センター　昭和五十二～五十四年

・『柳田冨士松伝』金子・柳田両翁頌徳会　昭和二十五年

・『総合商社の漂流　鈴木商店』桂　芳男著　日経新書　昭和五十二年

・『黒い米』武田　芳一著　のじぎく文庫　昭和三十八年

玉岡かおる氏　著書
「お家さん」（上・下）紹介

巨大商社鈴木商店の女店主鈴木よねの人生を著した大作です。玉岡さんは辰巳会の全国大会、例会に数回出席され、最初の時には執筆始めて一年半になるが完成にはまだ時間がかかるお話しをされていましたが、完成出版が平成十九年十一月二十一日に、なんと三年を要するほど執筆に苦労をされたお話しがありました。

大番頭金子直吉さんをはじめとして、皆がよりどころにしていた「よねさん・お家さん」を小説の視点から著していることに、読者を惹きつけるものがあります。

よね刀自の人となりを本号9ページに載せているのを心に留めて、玉岡さんの「お家さん」を読んでいただくと一層興味ある著書になることでしょう。

この玉岡さんの著書が将来に大河ドラマに採り上げられることを願いたいです。